

製品名: FAK (リン酸化 Tyr397) ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab04658**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:5000-1:10000
分子量	119kDa

抗原情報

遺伝子名	PTK2 PTK2; FAK; FAK1; Focal adhesion kinase 1; FADK 1; Focal adhesion kinase-related nonkinase;
別名	FRNK; Protein phosphatase 1 regulatory subunit 71; PPP1R71; Protein-tyrosine kinase 2; p125FAK; pp125FAK
遺伝子 ID	5747.0
SwissProt ID	Q05397
免疫原	抗血清は、ヒト FAK 由来の Tyr397 のリン酸化部位周辺の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 363-412

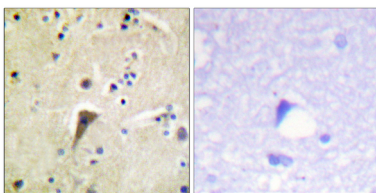
背景

タンパク質チロシンキナーゼ 2 (PTK2) ホモサピエンス この遺伝子は細胞質タンパク質チロシンキナーゼをコードしており、細胞外マトリックス成分の存在下で増殖する細胞間に形成される接着斑に集中して存在します。コードされているタンパク質はタンパク質チロシンキナーゼの FAK サブファミリーに属しますが、他のサブファミリーのキナーゼとは顕著な配列相同性がありません。この遺伝子の活性化は、特定の神経ペプチドまたは細胞外マトリックスとの細胞相互作用にตอบสนองして誘導される細胞増殖および細胞内シグナル伝達経路の重要な初期段階であると考えられます。この遺伝子には、異なるアイソフォームをコードする複数の転写バリエーションが見つっていますが、そのうち全長の性質が決定されているのは 4 つだけです。 [RefSeq 提供、2015 年 10 月],触媒活性: ATP + a [タンパク質]-L-チロシン = ADP + a [タンパク質]-L-チロシンリン酸。 ,ドメイン: カルボキシ末端領域は、FAK1 の接着斑への局在を仲介する接着斑標的化 (FAT) 配列の部位です。 ,ドメイン: 最初の Pro に富むドメインは、CRK 関連基質 (BCAR1) の SH3 ドメインおよび CASL と相互作用します。 ,機能: 細胞運動、増殖、アポトーシスに関するシグナル伝達経路に関する非受容体型タンパク質チロシンキナーゼ。細胞接着または抗体架橋によって誘導されるインテグリンのクラスター化、ポンベシンやリゾホスファチジン酸などのリガンドによる G タンパク質共役受容体 (GPCR) の占有、または LDL 受容体の占有に応じてチロシンリン酸化によって活性化されます。キナーゼ活性の上昇につながる腫瘍形成において潜在的な役割を果たします。 ,PTM:活性化時に 6 つのチロシン残基がリン酸化されます。 ,類似性:タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属します。チロシンキナーゼファミリー。 ,類似性:タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属します。チロシンキナーゼファミリー。FAK サブファミリー。 ,類似性:1 つの FERM ドメインを含みます。 ,類似性:1 つのタンパク質キナーゼドメインを含みます。 ,細胞内局在:接着斑の構成要素です。 ,サブユニット:CAS ファミリーメンバー、および GIT1、SORBS1、BCAR3 と相互作用します。RGNEF および SHB と相互作用します (類似性による)。TGFB111 と相互作用します。 ,組織特異性:試験したすべての臓器、リンパ系細胞株で発現しますが、脳で最も多く発現します。 ,

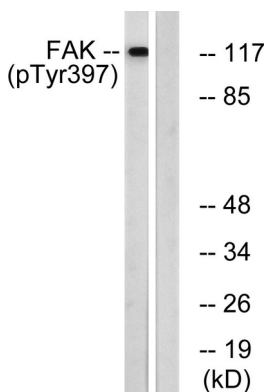
研究分野

ErbB_HER;ケモカイン;軸索誘導;VEGF;接着斑;白血球の内皮透過移動;アクチンと細胞骨格の調節;がんの経路;小細胞肺がん;

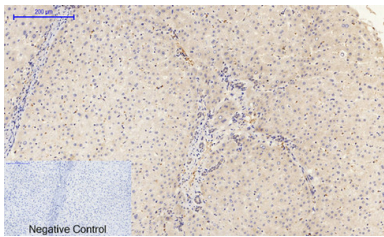
画像データ



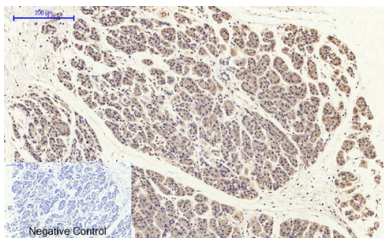
FAK (リン酸化 Tyr397) 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。



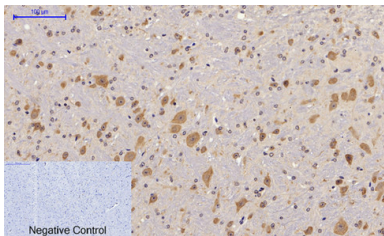
Ca²⁺ 40nM 30°処理した Jurkat 細胞ライセートの FAK (リン酸化 Tyr397) 抗体を用いたウェスタンブロット解析。右レーンはリン酸化ペプチドでブロッキングされている。



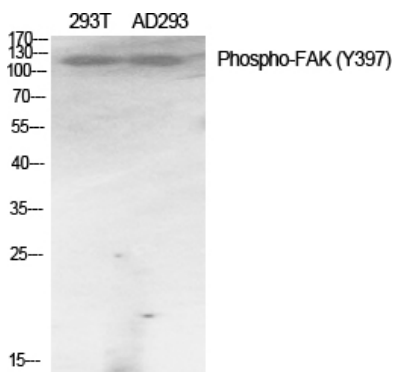
パラフィン包埋ヒト肝組織の免疫組織化学染色。1. FAK (リン酸化 Tyr397) ポリクローナル抗体を 1:200 に希釈 (4°C、一晩)。2. クエン酸ナトリウム (pH 6.0) を用いて抗体賦活化 (>98°C、20 分) を行った。3. 二次抗体を 1:200 に希釈 (室温、30 分)。ネガティブコントロールとして二次抗体のみを用いた。



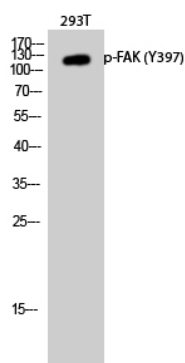
パラフィン包埋ヒト胃癌組織の免疫組織化学染色。1. FAK (リン酸化 Tyr397) ポリクローナル抗体を 1:200 に希釈 (4°C、一晩)。2. クエン酸ナトリウム (pH 6.0) を用いて抗体賦活化 (>98°C、20 分) を行った。3. 二次抗体を 1:200 に希釈 (室温、30 分)。ネガティブコントロールとして二次抗体のみを用いた。



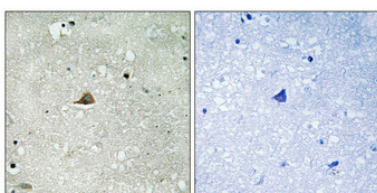
パラフィン包埋マウス脳組織の免疫組織化学染色。1. FAK (リン酸化 Tyr397) ポリクローナル抗体を 1:200 に希釈 (4°C、一晩)。2. クエン酸ナトリウム (pH 6.0) を用いて抗体賦活化 (>98°C、20 分) を行った。3. 二次抗体を 1:200 に希釈 (室温、30 分)。ネガティブコントロールとして二次抗体のみを用いた。



リン酸化 FAK (Y397) ポリクローナル抗体 (1: 1000 希釈) を用いた各種細胞のウェスタンブロット解析



293T 細胞のリン酸化 FAK (Y397) ポリクローナル抗体 (1: 1000 希釈) を用いたウェスタンブロット解析



パラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4°C、一晩) に希釈した。抗原賦活化には、高压高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。

